現（うつつ）の、街で。

—江　弘毅

Q—デパートやホテルのアーケードをのぞいてみると、相変わらずこんなの今どき誰が着るんだろうみたいな服やら、誰がこんな食器使うんだろうといったものがいっぱいあって、何も変わってないな、と思う。

A—それでほとんど客なんて見あたらない。

Q—あの人たち、ほんとうに分ってるんだろうか。今の時代というのを。それでまだトレンドなき時代のトレンドとか、ひと昔前の広告代理店みたいなこと言ってて、びっくりしてしまう。

A—高いものをたくさん売らなくちゃならないから、ほんとうに大変なんだよ。

Q—誰だって少しばかりのカネを持ったら、ヴィトンのバッグが欲しくなる、みたいなことは完全になくなった。

A—いや、なくなってないと思う。あのパターンの趣味を持った人は、やっぱりそのままだし、それ以外の人がもう欲しがらないようになっただけだ。

Q—やっぱり圧倒的に景気が影響してるよ。

A—それはいえるけど、ヴィトンやらMOMやらハンティングワールドを欲しがる世界で、やっぱり女子大生的な体質だと思う。その一点で全てが完結しているというか、他のアイテムは何でもいいみたいな。よく言われることだけど、毛皮を着て電車に乗ってスーパーの安売りに行くみたいな。

Q—それでも別にいいじゃない。その人がその程度のモノで幸せ感じるんだったらそれはそれでいい。とやかく言えない。

A—全然いいよ。ただ、そんな趣味を持たない人が増えてきた。つまりポルシェはいいクルマだと思うんだけど、俺にはとてもとても似合わないなあ、だから自分にとってのその価値は分からない。だからあんまり関心がない。買える買えないは全く別の問題なわけ。

Q—なるほど。その人にとっての価値か。確かにパリコレやらに出てくるようなハイファッション系の服って、自分たちは関係のない服だと思い始めてきた。それと似合う似合わないは全く別問題だ。エルメスな世界にどっぷりいる金持ち、多分、貴族やら億万長者とかがそれなんだろうけれども、そういう人らが誰もがカッコいいとは思えない。

A—そう、みんながそれに気がついてきているというのが大きい。その意味で、あの3〜4年前を経てきたというのは、やっぱり凄いよこれは。

Q—小和田雅子さんなんて、ライトブルーのカローラ乗ってんだもんな、週刊誌で見たんだけど。あの人が野球選手みたいなクルマ乗ったりしてたら、がっかりだもんなあ。ほんとに今の時代の気分って面白い。

A—へえー、カローラ乗ってんの。それに乗って外務省に通勤したり、買い物に行ったりしてたんだ。

Q—パリー木下なんて、どう思うんだろ、その事実に関して。

A—何も言えるはずないよ。たださっきのエルメスな世界のあの趣味の人たちはどうだろう。

Q—訳が分からないんじゃない。

A—エルメスやら、もっとスランでヴェルサーチにカローラはないよなあ。しかしあいう何でもできて皇后さまになるようなお方が、カローラに乗るセンスを持ってるというのは偉大だ。

Q—偉大も偉大。確実に日本人は変わる。

A—いや変わるんじゃなくて、本来あったもんだと思う。だから反対にハーブの生演奏やってるような口ココ的空間のホテルのメインダイニングで、代議士が久米宏みたいなスーツ着て、「シャトー・マルゴー」って言ってる世界も健在だ。新地のホステスみたいな女優連れてね。

【プロフィール】江　弘毅はじつによく生きている。ポジティブだから、人が好きだから、彼は出会うすべての人間、モノ、現象の胸ぐらをつかみ揺する。私も7年ほど前に初めて彼と会った時には泣かされそうになった。その後も何度か泣かされたが彼も何度か泣いていた。彼は今、「ミーツリージョナル」で街を現を揺すり続けている。彼が泣きながら揺すり続けている限り、かけ値なしの連中が彼を慕い、彼の仕事を欲求しているのだろう。記号じゃなくワケを知ろうとする彼は正味で恰好ええ男である。（バッキー・イノウエ）

修ちゃんの珍獣総進撃

—和泉　修

今回の吉本ネタはあるお弟子さんのいろんなエピソードを書いて行きたいと思います。

もちろん僕はお弟子さんは、取っていません。この弟子を取るというのも、何年以上、芸歴がいるとか、必ず取らなくてはいけないわけもないんです。さんまさんは、一回も弟子は取っていませんし、大助、花子さんのように弟子は、住み込みで、とっている方もいるし、様々な形があるのです。弟子になるには、前回も書きましたが、自分で直接言うパターンと紹介というパターンがあります。僕が一番笑ったのは、太平シローさんの弟子についた、中野君です。彼は直接言うパターンだったんですが。彼は、阪神さんの弟子になるために、昔のなんば花月の楽屋に来て、寝ている阪神さんの後ろ姿をみて、大声で「弟子にしてください」と、叫んだのです。しかし、その人は実はシローさんで、間違って弟子になってしまったのです。それから彼はいろんな伝説を作って行きました。有名なのが師匠の車を車庫にバックで入れるときです。師匠に「後ろどこまで行けるか、言うてくれ」と言われ、彼は後ろを見ながら、「オーライです、オーライです」そして車が、後ろの壁に当たってから「はい、ストップです。」と叫んだのです。それを見ていたサブローさんが、そういう時は、車と壁の間にはいったらいいと教えて、次にサブローさんの車を入れるときは、自分が挟まれて、痛くて車のトランクを叩きながら「師匠、ストップです。」と叫んだそうです。他にも師匠のジャケットとネクタイを持って横に立っていたとき、ネクタイをテーブルの上にあったコーヒーにつけていて、師匠が「お前ネクタイの先、コーヒーにつかっとるやないか」と怒ると、「師匠大丈夫です、まだ誰も飲んでません。」と答え、師匠に「お前はネクタイよりコーヒーのほうが大事か」、どやされたそうです。他にもよく聞き間違えての失敗をしていました。シロー師匠が玉子豆腐を買って来いと、頼むと2時間たって、帰って来たら、「師匠、親子豆腐はありませんでした」と一言。彼は大きな豆腐と小さな豆腐が、二段重ねで一緒になった豆腐をさがしていたのです。これぐらいは、まだましです。彼は一応、車の免許を持っていて、師匠を乗せて運転するのですが、ある時、師匠が「次の梅田花月の出番までに、タイヤの圧力調べといてくれ」と頼んだとき、彼はどこをどう聞き間違えたのか「タイヤにコロッケいれてくれ」と思い、ガソリンスタンドを回り続けた後、梅田花月に帰って来て、「師匠、大阪のガソリンスタンドは、タイヤにコロッケいれてくれませんでした」と言った、そして師匠に「ほなどこのガソリンスタンドやったらいれてくれんのや」とつっこまれ、「明日までに見つけます」と言ったそうです。そんな彼も今は実家の福岡に帰って、ガソリンスタンドで働いているそうです。そこへ行くとひょっとしてタイヤにコロッケをいれてくれるかも知れません。

【プロフィール】本名・釘田修吉。1962年生まれ。同志社大学文学部卒。吉本興業所属。1985年5月、漫才コンビ圭修としてデビュー。今宮戎新人漫才コンクール受賞、上方お笑い大賞銀賞受賞、花王名人大賞新人賞受賞等、受賞多数。学生時代にはボクシングで活躍し、高校フェザー級チャンピオン（昭和55年）に輝く。また、カバディー第一回社会人大会優勝。ドッヂボールは関西一と豪語する。通称吉本一のスポーツばか。現在は、ラジオ・TVのパーソナリティー、レポーター、司会等、ソロでも活躍中。唄って、踊って、ギャグれる、プロボクサーである。